

Coleridge の想像力と空想力との 区別の成立過程についての一考察

山下登

Samuel Taylor Coleridge が *Biographia Literaria*

(1817) に於て *Imagination* 「想像力」と *Fancy* 「空想力」とを区別して想像力が創造的な芸術創作の根本的な能力であることを強調したことは文学批評史上著名な出来事であり、文学史の言及するところである。その区別を彼が William Wordsworth (1770-1850), William Hazlitt (1778-1830), Leigh Hunt (1784-1890), John

Keats (1794-1821), John Ruskin (1819-1900) に影響を与え Edgar Allan Poe (1804-1849), T. E. Hulme (1883-1917), T. S. Eliot (1888-), I. A. Richard (1883-) 等によつてこの区別が再考され、批判され、現在に至るまで文学批評の詮議の的となつて来たことは

特筆すべき事実である。

さて、これらの文学史の影響関係を述べることは、こゝでは控え、その発生の原因である Coleridge の *Imagination* と *Fancy* との区別がどのような背景と状況の下に出来上つたものであるかについて探つてみることにする。

先ずその前に Coleridge はどのような所説を述べたのであつたか。Coleridge が *Biographia Literaria* 第四章に於て「フアンシー (*Fancy*) とイマジネーション (*Imagination*) とは世間一般に信じられてゐる様に、同一意義を持つ、或は全く同一の能力の程度の上の差を持つに過ぎないものに名づけられた二つの名称として考え

られるものではなく、明瞭に而も甚だしく相異なる二つの能力ではなかるうかと思う様になった。」(『文学評論』桂田利吉訳 思索社 七六―七七頁)と述べ、今迄一般に考えられて来た様に、想像力と空想力が程度の差による能力ではなく全く別個の能力であると考えたのである。そして更に同第十三章に於て、

「私は想像力を第一と第二として考える。第一の想像力は人間の生きる力であり、又あらゆる人間知覚の根本的作用であり、且つそれは自己を無限性の中に拡大する永遠なる創造作用を有限なる心中に反復する。第二の想像力は前者の変形であり、意識的な意志が伴うが、併し其の作用の種類に於ては第一と同様にして、唯其の活動の程度と様式とに於て異なるのみである。それは再創造せんが為に溶解し、拡充し、拡散し、或は此の過程が不可能なる場合に於ても、尚常に理想化と調和統一に向つて懂れる。凡そ客体が客体として固定し、死物であるに反し、それは本質的に生けるものである。」

それに反し空想力は固定的、或は有限的なるもの以外に何等その遊び相手を持たない。実に空想は時間及び空間の秩序から解放された記憶の様式に過ぎない。それは我々が選択と呼ぶ所の意欲の經驗的現象と交錯し、且

つそれによって制約される。然し空想力は普通の記憶と同様聯合の法則により已成品としてのそれが材料を受容せねばならぬ。」

(*Ibid.*, pp. 398-399) と述べてゐる。

Coleridge は先づ想像力を第一と第二に分け、第一の想像力を一般の人々のものとし、第二の想像力を詩人のものとして区別した。第二の想像力は意識的であると同時に無意識的に働き、第一の想像力より高い活動の程度のものであり、様式に於て異つてゐるという。そして芸術素材を溶解し、拡充し、拡散して再創造する製作過程を指して謂う名前であるという。空想力は時間、空間の秩序から解放された記憶の様式で、聯合法則に従つて形象が結合されるのであり、想像力と共に芸術創作に必要な能力であるという。

では、Coleridge はこの区別をどの様にして思ひ付いたのであろうか。先ず彼が *Biographia Literaria* 第四章に述べている所を参考にすれば、

「幸にも私が Wordsworth 氏と個人的に知り合う様になつたのは二十四歳の時であつたが私の記憶の続く限り、或る原稿のままの詩を彼が読んでくれた時、それが私の心に及ぼした突如としての影響は恐らく忘れ得ない

であろう。その詩は尚未刊のままになっているがその各聯の文体の調子は最初 *Lyrical Ballads* の第一巻に収められた *Female Vagrant* のそれと全く同一のものであった。其処には何等の無理な思想や無理な語法と思われる点はなく、又形象が群り騒々しく混雜を来しているということもなかった。……(中略)

私は彼の詩のこのような特質に感動するや否や、直ちにその何たるかを理解しようとした。反復熟考の結果、先ず私はファンシィ (*Fancy*) とイマジネーション (*Imagination*) とは、……明瞭に、而も甚だしく相違する二つの能力ではなからうかと思うようになった。〔「文学評伝」桂田利吉訳 思索社 一九四九年 pp. 73-78〕と云っている。これに依ると、Coleridge 二十四歳の時、(Coleridge の二十四歳という言葉をそのまま信用すれば、一七九六年に) Wordsworth と知り合う様になったのだが、この時、Wordsworth から *Female Vagrant* に似た未刊の詩を朗読して聞かされ、非常な感銘を受け、この詩を制作した Wordsworth の能力が何であるかを繰り返し反覆して熟考した結果、想像力と空想力という能力を思い付いたと言っている。そして更に続けて彼はこの思い付と意味の弁別とが「我が国に於て私が最

初である」(*Biographia Literaria*. Shawcross' Edition p. 36) と自負している。しかし筆者はこの点について Coleridge が誰からも影響を受けずにこの想像力と空想力との区別を思い付いたとは考えることが出来ない。半ば独創であり、半ば影響模倣によると考えられる。

Biographia Literaria の編集者 J. Shawcross が一九〇七年にこの言葉に注を施して、

『我が国で私が最初の者であったという信念』この文中の『我が国で』という言葉に何らかの強調を置く必要があるとは考えられない。

Coleridge が *Imagination* と *Fancy* との区別を最初に思い付いた時、(或る程度、Wordsworth のものを除いては) は誰かに負っていたということを私は見出すことが出来なう。

ドイツ語の “*Phantasie*” と “*Einbildungskraft*” という語は私の見る限りでは Coleridge の *Fancy* と *Imagination* の意味にはっきりと充當させたことはなかった。“*Einbildungskraft*” には Coleridge の *Fancy* の意味を辛じて持たせることが出来るけれども、“*Phantasie*” も “*Einbildungskraft*” の語のどちらも漠然と Coleridge の *Imagination* を表現するのに用いることが

出来ること云々。Jean Paul の *Aesthetik* に於ける “*Einbildungskraft*” と “*Phantasie*” との区別 (即ち “*Einbildungskraft*” 及び 『可能性を帯びた潑刺たる記憶』の意)、 “*Phantasie*” は 『各部を全一に統合する力』の意) は Coleridge の区別を確かに想わせる。然し Coleridge が Jean Paul に何らかを負うてゐるところがあつたところとは不可能である。彼は一八一七年に於てさえ *Aesthetik* を『ほんの一才のこいた丈け』であつたから。そして Coleridge にあつては常に Jean Paul の “*Einbildungskraft*” の語の方がより高い能力を示してゐたから。 (Shawcross' Edition. *Biographia Literaria*. Notes. Oxford, 1954. p. 226 猶 訳文は桂田利吉訳「文学自伝」思索社 一九四九年出版 p. 397, 398 を参考にした。) と述べた。これに依ると、Coleridge は想像力と空想力の区別を他の誰からも影響の負目を受けて居らず、Coleridge の全くの独創であり、ハイムの Jean Paul の *Einbildungskraft* と *Phantasie* の区別を想わせない。 Coleridge は「一八一七年に於つたから」 Jean Paul の *Aesthetik* を少しのさうした程度」であつて、且つ Coleridge の *Imagination* に於て Jean Paul の *Phantasie* が意味の上で相当することになり、又この文章についての

Shawcross の表現の仕方は少し曖昧で、逡巡してゐる分りにくいが、Coleridge の *Fancy* に於て Jean Paul の *Einbildungskraft* が相当するから、Coleridge のものと Jean Paul のものとは用語と意味の取り方が逆であつて、それによつても影響を受けていないということが出来ると言ふのである。

又我国の桂田利吉氏もつとに Coleridge の *Biographia Literaria* を訳され、その脚注に於て、先に挙げた J. Shawcross の説を支持され、『想像力』と『空想力』との区別を立てたのは全く Coleridge の創見である。 (「文学自伝」桂田利吉訳の脚注 p. 398 思索社 一九四九年) と述べられ、更に又その巻末論文「芸術創作の根本的能力としての想像力説」に於て、「この区別は Shawcross も指摘してゐる如く、全く Coleridge の独創的見解に基づくものである。従来この区別に就いては、彼は Jean Paul Richter の *Die Vorstufe der Aesthetik* (1804-12) 中に於ける *Einbildungskraft* と *Phantasie* との区別に暗喩を得たもののひまゝ (The History of English Literary Criticism の著者 Wylie はその代表的なものであらう。) との説がなされてゐたが今日に於てはこれは已に葬られるべき過去に於ける単

なる臆説に過ぎないであろう。何故なれば、Jean Paul に於ては、両者の区別は全く反対、即ち *Phantastie* (*Fancy*) を以て芸術創作の最高能力となし、*Einbildungskraft* (*Imagination*) を以て却って芸術以前の能力として考えているのみならず、Coleridge は *Biographia Literaria* 出版の年、即ち一八一七年に於てすら、『美学入門』に就いては殆ど瞥見した程度の知識以外に出ていなかったのである。且つ彼は同書のことには就いては彼の文献中殆ど何処にも述べているところがない。』(Ibid. pp. 472-473) と述べておられる。又故佐藤清教授も「*Fancy* と *Imagination* の区別を立てたことは Coleridge の創見である」とは明かだ。勿論 Wordsworth に負う所多きは言うを俟たぬが、独乙語の *Phantasie* と *Einbildungskraft* という語はまだ当時明確な区別を立てて考えられてはいなかった。この両語に関し、Jean Paul が下した区別(前者を *potentiated brightly-coloured memory* とし、後者を *power of 'making all parts into a whole'* とする)は Coleridge の説を想わせるが、Coleridge は Paul に負う所は少しもなご。(Shawcross 参照) (Coleridge, S. T. *Biographia Literaria*. 研究社 昭和三年十一月) 注解者 佐藤清

脚注 p. 213) と述べておられる。しかし筆者はその様に考えることが出来ない。筆者は先づ Pearsall Rogan Smith (1865-1946) のこれについての見解を思い出さねばならぬ。「Brandl はその著 *Life of Coleridge* に於て、Coleridge が天才と才能(才能とは作られたものであり、天才とは苦勞と研究を必要としない天賦の才のこと)との間に立てた区別を Jean Paul Richter の著述の読書からその源泉を得ている。そして又 *Fancy* と *Imagination* という『より高い創造的な』能力との間の有名な区別も同じ源泉からその資料を得ている (Brandl 英語訳 p. 316) と述べている。」(Pearsall Logan Smith. *Four Romantic Words*. Constable, 1948. p. 111, 112) この文章はライムの英語英文学者 Alois Brandl (1855-1940) の著述 *Samuel Taylor Coleridge* (1886) の英語訳(この英語訳は Lady Eastlake が一八八七年に英語に翻訳したものを指していると考えられる。『Livingston Lowes の *The Road to Xanadu*, 1951, p. 594 に依る)から Logan Smith が用いたものと考えられる。

又筆者は René Wellek が *A History of Modern Criticism* (1955) 第六章 “Coleridge” に述べた言葉を

思ふ出なむならん。

『機智と諧謔』にこの講義の原稿が Jean Paul の *Vorschule* からの引用の寄せ集め細工である。(René Wellek. *A History of Modern Criticism: 1750-1950. The Romantic Age*. London: Jonathan Cape, 1955. p. 153)

(René Wellek の Coleridge の「機智と諧謔」にこの原稿が T. M. Raysor. *Coleridge's Miscellaneous Criticism*. London, 1936. pp. 11, 117, 440 ff.) に載やうである (René Wellek: *A History of Modern Criticism: Notes*. No. 12 p. 390) である。われわれは Coleridge が Jean Paul の *Vorschule von Aesthetik* を精読してゐたことは明らかである。しかし Raysor の *Coleridge's Miscellaneous Criticism* が筆者の手許にならぬ Coleridge が、何年頃の *Vorschule von Aesthetik* を読んでゐたのかそれについて不明である。それを調べる手懸として先の J. Shawcross の *Biographia Literaria* の *Notes* に戻ることにする。J. Shawcross は先に挙げた様に「Coleridge が Jean Paul に何か負うてゐるところがあつたところとは不可能である。彼は一八一七年に於ては *Aesthetik* を

『ほんの一寸のさうた大け』であつたから」(Shawcross' Edition. *Biographia Literaria: Notes*. p. 226) と述べてゐるが、この文中の *Aesthetik* を「ほんの一寸のさうた大け」とする言葉は Coleridge が一八一七年十二月十三日付の J. H. Green 宛の手紙の中で述べた言葉である。

「私は Jean Paul の *Vorschule von Aesthetik* をほんの一寸のさうたに過ぎない。しかし私は私が数年前に超自然についての論文の中で書いた一文と殆ど逐語逐語同じ文を *Vorschule von Aesthetik* の中に見出した。」(Earl Leslie Griggs. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Vol., IV Oxford, 1959. p. 793)

J. Shawcross は Coleridge の一八一七年の J. H. Green 宛への手紙を根拠に Coleridge の *Biographia Literaria* に対する Jean Paul の *Vorschule von Aesthetik* からの影響が無いと断定したのは少しく早計ではなかつたらうか。J. Shawcross が *Biographia Literaria* を編集したのが一九〇七年であるが、Jean Paul の Coleridge への影響説を最初に唱えた Alois Brandl の *Life of Coleridge* が出版されたのが一八八六年であつて、これに反対して Coleridge の *Imagination* を

Fanny の区別が独創であることを弁護するために J. Shawcross は先に挙げた *Biographia Literaria* の脚注を付けたのではなかったろうか。一九〇七年と言えど、世界状況に於ては一八八三年に締結された仏墺伊の三国同盟に対抗して英仏露が三国協商を結んだ年である。この二大ブロックの対立がやがて第一次大戦へと持ち越されることになるわけだが、従って、一九〇七年は以前から次第に險悪化しつつあった英国とドイツが決定的な対立を生んだ年なのである。

ドイツの Jean Paul の Coleridge への影響説を通して、学問の上で J. Shawcross の心に英国を思ふ國民的矜持が働かなかったとは断定しがたい。それにしても、J. Shawcross が Coleridge の一八一七年の J. H. Green 宛の書簡に載せた「*Vorschule von Aesthetic*」をほんの一寸のどつた程度であった。」という言葉から Jean Paul の Coleridge への影響が無いと考えたのは少し心細い理由に頼っていると言ふべきであろう。Coleridge が一八一七年に Jean Paul の *Vorschule von Aesthetic* を見ていたのなら、彼がそれ以前に影響を受ける可能性はなかったであろうか。新しい資料によると、Coleridge は早くから Jean Paul の名を知っていたのである。E. L.

Griggs 編集の *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge* (1959) に依ると Coleridge は一八一一年三月十二日付の Henry Crabb Robinson 宛の手紙の中で初めて Jean Paul の名を挙げている。

「こんな走り書きが Jean Paul の表現法に非常に多いのを今ふと思ひ付きました。御了解頂けると思いますが、私はその選集の表題を見ただけで、中をまだのいてはいないのです。貴方がお入用でなかったら、私が元本を読む間、少しの間、私にそれを貸していただけると有難いのですが、どうか次々と元本が私の手に入る様にして下さい。そうすれば、二巻で三日間下されば、非常に注意してそれをお返しすることをお約束します云々」(E. L. Griggs, *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, Vol. III pp. 305, 306 (Oxford, 1959))

これで見ると、一八一一年に Coleridge が Crabb Robinson の持つ Jean Paul の選集を借りたがっていること、又 Crabb Robinson から借りたことが出来た元本を Crabb Robinson の持っているその選集とを比較照合したいと思っていることが知られる。E. L. Griggs はこの手紙に注を施して、Jean Paul の選集と云うのは恐らく Robinson がドイツから書を写して来た

と考えられる *Jean Paul Geist* (2 vols, 1801) 「ジャン・パウル名句集」のことをいうのであらうと推定を下している。(現在)の *Jean Paul Geist* は Dr. Williams Library に Coleridge 自筆の注釈が付いて残っている(そうである)。又同所に付けられた Griggs の注に依ると Coleridge はこの外 *Jean Paul* の *Das Kampfer Thal* (2 vols, 1797) 「露魂の不滅のつづき」 *Palingenesis* (1798) 「新生」 *Museum* (1814) 「美術館」等に注釈を施したと述べている。(Coleridge の注釈の付いている *Das Kampfer Thal* は現在 Princeton 大学に *Palingenesis* は所在不明 *Museum* は Dr. Williams Library に所蔵されている(そうである)。(Ibid., p. 306 脚注)

又 Coleridge は一八一三年十一月二十六日付の前記と同じ Henry Crabb Robinson 宛の手紙の中では、

「本当のことを言いますと、私は貴方の持っていられる *Jean Paul Richter* の選集と私の持っている書物の中、(形而上学を除く) 殆どどんな書物とでも交換して下されば嬉しいのですが。——私が若し貴方でしたら、その動機を御説明申し上げるのですが云々。」(Ibid., p. 462)

と述べている。これら二通の手紙によって Coleridge が一八一一年頃から *Jean Paul* に異常な程に特別の関心を払っていたことが窺える。従って、一八〇四年に *Hamburg* 大学から出版された *Jean Paul* の *Vorschule von Aesthetik* の書物の名を Coleridge は一八一一年頃には知っていたであらうし、又何らかの径路を経て *Vorschule von Aesthetik* の内容についてあらかじめ知っていた様に考えられる。そして一八一六年の七月頃まではそれを読んでしまっていたと推定される。というのは Coleridge が一八一六年七月四日付の John Murry 宛の手紙の中で、

「*Jean Paul Richter* は二三の非常に面白い論文の目次を提供してくれた。」(Ibid., p. 649)

と云っているからである。この「二三の非常に面白い論文の目次」という言葉の内容は何であつたであろうか。筆者は Coleridge が目次を繰っていて、はたと手を打って、小躍して喜んだと想像される面白い論文と言え、きっと *Jean Paul* の *Vorschule von Aesthetik* に於ける第一部、想像力と空想力の区別、天才と才能の区別、それに第三部、機智と諧謔の項目を含んでいる論文ではなかつたらうかと想定される。Coleridge が一八一

六年頃に *Vorschule von Aesthetik* を読んでしまつて、たとすれば、一八一五年頃に一冊の本として一応出版する体裁を整えた *Biographia Literaria* が出版者との交渉に手まどり、一八一七年七月に二巻の書物として出版する運びになる迄、其間約二年の間訂正加筆されていた事実、特に *Imagination* と *Fancy* の区別が載せられている第一巻の最後の部分が訂正加筆された事実（この項 Shawcross' Edition. *Biographia Literaria. Supplementary Note pp. xc-xciii* に依る。）に依つて *Biographia Literaria* の *Imagination* と *Fancy* の区別が *Vorschule von Aesthetik* からの影響を受ける可能性が充分あったと考えられる。

では、Jean Paul の *Vorschule von Aesthetik* とは如何なる内容をもつものであらうか。それは Leipzig 大学に於ける公演講義録であつたが、Jean Paul はその第一部第二章、*Stufenfolge poetische Kräfte* 「詩作能力の階程」に於て、*Einbildungskraft* 「空想力」と *Phantasie* 「想像力」とを区別して、次の様に述べている。

「*Einbildungskraft*

Einbildungskraft は *Bildungskraft* 或いは *Phantasie* の散文である。それは動物が夢みたり、恐れたりするが

故に、動物も又所有する有力な潑刺たる記憶以外の何物でもない。

Einbildungskraft の形象は現実の世界から飛びゆく落葉に過ぎない。熱病者や神経衰弱者や酒飲家が内的世界から外的世界に歩み、その中で凍死する程にこれらの形象を色濃く、鮮かにすることが出来る。

Bildungskraft 或いは *Phantasie*

しかしより高きものは *Phantasie* 或いは *Bildungskraft* である。それは世界である。靈の靈である。その他の能力の元素精靈の如きものである。それ故に偉大なる *Phantasie* は実に個々の能力、例えば、機智、明察等の能力に向つて掘り下げ、導くことが出来る。機智が天然の遊技的な字母の転置であるなら、*Phantasie* は僅かの形象を以て表現し得る天然の象形文字である。*Phantasie* はあらゆる部分を全一なものとする。——その他の能力や経験が天然の書物から唯花卉を引きちぎるに過ぎないのに対して、——そしてあらゆる世界の部分を世界へ。それはあらゆるものを全体に統一する。又無限の全一に統合する。それ故にそれは詩的楽天観の領域でそれが住む形姿の美とその大氣中で太陽の如き存在が行く自由とを歩む。それは恰も絶対と認識の無限を死すべき人間の

前により近く、より目に見えるべく持ち来らすのである。それ故にそれは非常に多くの未来と、非常に多くの過去とを、その二つの時による創造の永遠性をもたらす。もう一つの時が無限なるものと全一なるものとなることが出来ぬうちに。空氣の充ちている一つの部屋からではなくて、何はともあれ、氣柱の全き高さから天の碧青が作られるのである。」(Jean Paul. *Vorschule von Aesthetik*. Vol. I. pp. 31-33 Hamburg: Friedrich Perthes, 1804.)

Jean Paul は *Einbildungskraft* が動物やあらゆる人間の持つる有力な鮮かな記憶を扱うもので、芸術製作の上で欠くことの出来ぬものであり、それに対して *Phantasie* は *Einbildungskraft* より一段と高いものである。それは「世界の中の世界、靈の中の靈」であり、芸術の世界に君臨して、「あらゆるものを無限に統一し、全一化してやまない」全能者であり、それは太陽の行くが如くに美の花園を闊歩する王者の様な能力であり、理性によって深い認識に達する芸術的構想力であると言う。

これは Coleridge の *Biographia Literaria* 第十三章の *Imagination* と *Fancy* との区別を我々に彷彿とさせるものがある。

「*Imagination* (想像力) は再創造するために (素材を) 溶解し、拡散し、消散させる。

或いは何としても、理想化し、統一化せんと努力する。それは本質的に生きているものであり、丁度あらゆる対象が対象としては本質的に固定し、死んでいるように。

それに対し、*Fancy* (空想力) は固定したものや有限なもの以外にその他の遊び相手を持たない。*Fancy* は実際時間と空間の秩序から解放された記憶の様式に過ぎない。」(Shawcross' Edition *Biographia Literaria*, p. 202)

この様に Coleridge と Jean Paul の文章を比較してみる時、その両者の考え方の似ているのに驚く外はない。Coleridge は Jean Paul から影響なくこの文章を述べたのであろうか。若し影響なく同じ考えを述べたものであるとすれば、時代精神が天才的頭脳の人に同じ考えを孕ませた一例として、文化史に於ける注目すべき思考の類同として捕えることが出来る。しかし筆者には直接の影響によるものと考える外はない。猶両者を比較してみても、注意すべきことは Coleridge が *Imagination* (想像力) と呼んでいるものは Jean Paul に於ては *Phan-*

lastie に相当し、Coleridge の Fancy (空想力) を Jean Paul の Einbildungskraft に相当するものである。桂田利吉博士や故佐藤清教授は *Biographia Literaria* に付けられた脚注

“The distinction made by Jean Paul in his *Aesthetik* between ‘*Einbildungskraft*’ and ‘*Phantastie*’ (according to which the former is ‘a potentiated brightly-coloured memory’; whereas the latter is the power of ‘making all parts into at whole’) certainly recalls Coleridge’s distinction” (Shawcross’ Edition. *Biographia Literaria*, p. 226)

を訳され、その文中の “the former” を “*Phantastie*” とし、“the latter” を “*Einbildungskraft*” として訳されているが、「文学評伝」桂田利吉訳 思索社 一九四九年出版 p. 398 英文学叢書 *Biographia Literaria* 佐藤清注解 研究社 昭和三年十一月発行 p. 213) これは誤り、 “the former” を “*Einbildungskraft*” とし、“the latter” を “*Phantastie*” とし、逆に訳すべきである。しかし、この注目すべきことは語源の上で、又同時に語感の上で、桂田氏や佐藤氏が間違われた様に “*Phantastie*” には Fancy が “*Einbildungskraft*” に

は *Imagination* が相当するものである。Coleridge は言葉と表現内容とを Jean Paul のものとは逆に使っているのであるが、これは彼が故意にやったものか、無意識の中に行ったものであるかについては定かではない。恐らく彼は当時阿片を服用していたから、阿片の作用によって、半ば意識的に、半ば無意識の中に行ったのかも知れない。Coleridge の頭脳の働きはこの様に言語形式と内容、言葉と意味、表象と内容とを置き換えることが出来た非常に特異な頭脳であったと考えられる。この作用の又の名を潜在意識を操作する想像力の作用と言ってもいかも知れない。The Road to Xanadu—A Study by the Ways of the Imagination (1927) の著者 Livingston Lowes (1867—) 教授が指摘している様に、Coleridge は “The Rime of the Ancient Mariner” (1798)

「老水夫行」を創作した時、彼は英国に居ながらにして、南極の真白な氷のくずれる凄まじい光景を真迫的な詩として定着させることに成功したが、それは彼が当時頻繁に行われた北極海の探検記、例えば Thomas James の *Strange and Dangerous Voyage* や Martens Fredrick の *Voyage into Spitzbergen and Greenland* 等を読流す中、それらに出づる語句を記憶し、そしてそれ

らを駆使して、詩を創作したが、その時、北極ではなくて、南極の氷のくずれる様を歌うのに応用した。又同じ *Ancient Mariner* に於ける詩句、

“ *The suu came up upon the left, / Out of the sea
came he ! / And he shone bright, amnd on the right /
Went doren into the sea.* ”

は古代の老水夫がアメリカ大陸を船で迂回したことを示す語句として用いたのであったが、これは実はヘロドトスの史記に記されていた語句であり、古代のフェニキア人達がアフリカ大陸の海岸線を船で迂回した時、海岸線に沿って行くとやがて船の舷が回転しているのを知らずして、太陽が西から出て東に沈んだと錯覚して、驚

き、地の果の不思議な現象であると考え、帰国した時、ヘロドトスにその現象を報告し、ヘロドトスは地の果の不思議な出来事として史記に記録したのであったが、Coleridge はこの史記を読んでいて、古代の老水夫の船がアフリカ大陸ではなくして、アメリカ大陸の海岸線を迂回したことを示す語句として先の詩句を作ったのである。こうした例によって解る様に、Coleridge の頭脳は過去の読書による知識の畜積より成り、その潜在意識を想像力によって自由に駆使することが出来たのだが、*Imagination* と *Fancy* の区別も Jean Paul の *Einbildungskraft* と *Phantasie* の区別を逆に使用したものである。